

宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史的変遷に関する研究

——震災救出資料を中心として——

赤字で苦しんだ和船経営

研究代表者 千葉 勝衛

初年度の研究テーマを「和船時代の遠洋漁業」として資料収集をはじめたところ、時すでに遅く文書資料も遺物も残っていなかった。昭和50年代の建築ブームの折にその多くは廃棄されていた。当時の経営者宅では「和船経営に失敗して財産を減らした」「和船の借金のために苦勞をした」という話を多く聞かされた。そこで研究の視点として、赤字経営の実態とその要因を検討することとした。

明治期には大島には50隻もの和船があったとされているが、その規模や経営方式からつぎの二つに分類することができる。

1. 自ら漁船を建造して所有し、船頭を雇って操業から水揚げまでを委任して経営する方式。これを船主経営者と呼ぶこととした。この方式での経営者は10人位を数える。この階層の人たち



写真1 川島秀一教授、大川啓准教授、蝦名裕一准教授を迎えての定例研究会（気仙沼大島公民館／2016年11月20日）



写真2 定例研究会（大島公民館／2016年12月12日）

は農地を持ち、船への食料や野菜などを自前で供給していた。また、鰹節製造を行い、船から水揚げしたカツオで加工業も営むという農漁工の関連経営をした人たちであった。

2. 漁船のない人たちは気仙沼方面の間屋筋から漁船を借り（運上金を支払う）て船元として和船経営を行った。この方式を船元経営者とした。船元たる経営者は自ら船頭として乗船して操業をし漁獲物の販売まで行った。この人たちは船を借りる他に、経営資金も問屋船主に仰いだので、漁獲物の販売には問屋主導で行われることが多かったようである。

赤字経営で苦しんだのは、船元経営者に多かったが、明治30年代には船主経営者も経営がきびしくなり漁船経営を断念する人もでてくるようになった。経営者が困れば当然漁船員たちも困窮に陥っていった。

このように経営者も漁船員も不況で苦しんだ和船経営の実態を既存の資料などを調べて明らかにし、その要因を検討することを今後の課題として研究を進めていきたい。